Theme 4

平澤　興

ひらさわこう

大学者・平澤　興

元京都大学総長であり日本学士院賞や勲一等瑞宝章を受章した世界的な脳神経解剖学者・平澤興は、その晩年、新学社とともに大いなる物語を織りなした。生涯最も大切にした人生信条「生きるとは燃ゆる也」そのままに、新学社を舞台にした平澤の教育活動は常に、情熱に燃えあがっていた。

平澤興は四十年間、日本における神経解剖学の草分けとして、主として運動神経とよぶ神経路の研究を行なった。神経路には、脳からの命令を伝える錐体路と、命令された運動をうまくまとめあげる錐体外路があるが、とくに最も難解であった錐体外路系について画期的業績をあげたのである。そして世界医学史の千年のちにまで残るものと評価されるこの研究は、我々の身体の運動が人間の心というものに支配されていることを証明するものであった。

「わが平澤先生は、学問の円熟を、人柄として体現せられた、偉とか巨と讃えるにふさわしい、方今稀有の学者と、私は深く尊敬しているのである」

（「薦辞」　平澤興著『心の鏡』全日本家庭教育研究会）と、保田與重郎は至上の言葉で讃えた。

平澤　興

明治33年（1900）10月５日生
平成元年（1989）６月17日歿

◀昭和39年４月４日、日本教材文化研究所設立会合での佐藤春夫と平澤興。これが二人の最初で最後の出会いとなる

新学社との出会いと歩み

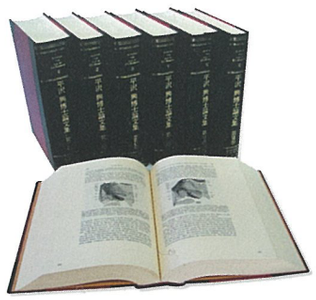
平澤興と新学社との出会いは、当時奈良女子大学の学長であった落合太郎の紹介による。昭和三十九年一月の中頃、『計画学習』巻頭言の原稿執筆依頼から端を発するのであった。巻頭言の執筆者開拓を担っていた柳井道弘が初めて平澤の元を訪ねたとき、平澤は京大総長退任直後で六四歳だった。そして三月には、原稿執筆のお礼とともに設立の準備段階にあった日本教材文化研究所への協力を依頼するために、社長の奥西保が平澤を訪問した。

昭和三十九年四月、佐藤春夫の新学社総裁推戴式とともに、同日、現財団の前身・日本教材文化研究所の設立会があり、初代所長に佐藤が就任した。そしてこの会合の席で、文学の巨匠と医学界の泰斗が最初で最後の出会いを果たしたのである。

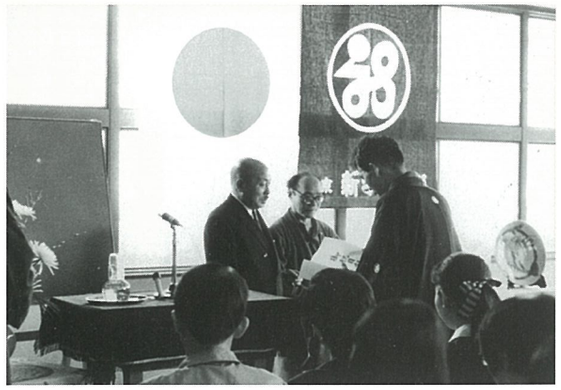
席が隣り合い、平澤は佐藤に、精神活動の本部である大脳表面には一四〇億個の神経細胞があり地球上にそれを全部完全に使った人はいない、人間には誰にでも無限の可能性があるという話をした。佐藤は、それを興味深く聞いていた。その晩、佐藤は夫人にその話をしたが、大脳表面の神経細胞がいくつあるのかどうしても思い出せない、その数が気にかかりなかなか眠ろうとせず、夫人が「そんな大事な話を忘れるなんていけませんね。明日もう一度お伺いすればよいでしょう」と言うと、ようやく就寝したという。

佐藤春夫はそのわずか一カ月後、五月六日に急逝する。そして法事の折、佐藤夫人から、佐藤が平澤興の話にたいへん感銘していたということを聞き、奥西や柳井らは、それならば、と、平澤に後任をお願いしに行ったのである。すると平澤は「保田先生はどのように申しておられますか」、奥西は「勿論、保田先生とも相談のうえです」。そののち、改めて奥西は保田とともに訪問、平澤は快諾するのである。

こうして昭和三十九年六月、平澤興は日本教材文化研究所の第二代所長となったが、その真面目な性格から、定例会にも喜んで出席し、新学社が発行する教材は時間の許す限り目を



◀昭和56年10月、新学社より刊行された『平澤興博士論文集』全７巻。平澤は巻末の「感謝の言葉」のなかで次のように述べている。「私がこの論文集を出したくて出せない淋しそうな姿を、じっと心深く見ておられたのが、教育出版社である新学社の奥西保氏であるが、この奥西氏こそは、この論文集の発刊にその第一石を投じて下さった方である。そういうことを口に出してお願いしたなどということは一度もないのであるが、何げなく私が研究の話などしているうちに、いつしか私の気持ちを察して、この論文集の刊行を計画され…」。



昭和45年11月13日、旧本社講話室で催された棟方志功（文化勲章）、平澤興（勲一等瑞宝章）受章祝賀会にて。保田與重郎により二人に新学社からの記念品目録が献呈された。また、内助の功に捧げる勲章として、棟方夫人へは肩かけ、平澤夫人へはポータブルラジオが贈られた

とおすなど、誠心誠意務めたのである。また、『教育日本新聞』への連載や「新学社文庫」の『生命の探求者』刊行など、次第に新学社との関わりも深まり、やがて社員の皆さんのために毎週話をしようと自ら提案、昭和四十五年四月三日から毎週金曜日の「朝の講話」が開始されるのである。平澤の講話は、他界する平成元年まで、ほとんど休むことなく行なわれた。

そして昭和四十八年一月、平澤興は第二代目の新学社総裁に就任した。社員との交流はいよいよ親密で温かく、新春互禮会や誕生会、社員運動会にも出席し、徳島支社や九州支社を訪問して講話を行なうなど、会社全体が平澤の慈愛に包まれるようであった。

昭和六十一年四月、本社ビルの増改築が成るに及び、五階に「総裁室」を設置し、平澤興の執務室とした。総裁不在の現在も、社員はその部屋を「総裁室」とよび慣わしている。

家庭教育確立のために

平澤興は早く、脳生理学に基いた人間の成長過程についての深い洞察から、人間の基本的性格をつくる幼児教育の意義、そして母親の役割の重要性を痛感していた。若い頃から幼稚園をやってみたいと口癖のように言っていたという。そして、新学社との出会いを契機に、家庭教育運動の実践を始める。「世のお母さん方の子育てのお手伝いをしよう」と自ら創始・指導した運動こそ、「家庭教育の確立」を目標に掲げた全日本家庭教育研究会（全家研）運動である。全家研運動は、独自の対話主事制度や教育モニター制度による家庭学習誌『ポピー』発行と相俟（あいま）って、全国規模の巨大な運動に発展していった。

平澤は支部長大会や対話主事総会に毎年欠かさず出席、末端のモニターにまで激励と握手を欠かさず、熱烈に支持する母親たちは年を追って夥（おびただ）しい数にのぼり、つれて会員も右肩上がりに増大していった。「伸ばそうすくすく尊いよい子――子供には無限の可能性があります」という平澤の言葉はやがて、全家研の祈りとなった。「教育とは、自ら燃えて相手に火をつけ、相手を燃やすことである」という信条のとおり、全家研運動はいつしか、平澤を中心とした大いなる情熱の火となって、国中の母たちの胸に灯をともしていった。平成元年六月十七日、八九歳で亡くなるまで、平澤は国の未来を担（にな）う子供たちのために、全情熱を傾けつづけたのである。

昭和45年４月20日、落柿舎で行なわれた俳人塔竢工祭にて。前列、保田與重郎と平澤興、後列、左は柳井道弘、右は奥西保

最晩年、平澤は自身の人生をおよそ二十年単位で四期に分けたうえで、京大総長退任後の第四期については、官民問わずさまざまな機関や企業の要職にあったなか、最も心を注いで来たのは全家研運動であると述懐している。奥西が「先生は新学社にたいへん親しくして下さっていますが、どうしてでしょうか」と訊ねると、平澤はこう答えたという。

「何故だかわからんね。しかし、わからないものほど大事なものです。理屈でわかるものなんて、大したものではない」

昭和52年５月12日、平澤興は保田與重郎とともに徳島支社を訪問し、「いのちの不思議」と題する講話を行なった